



Liberia Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1985 精道教育促進協会 (芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の聲

ロザリオ

人間の、人間のための祈り

1 慣例として聖なるロザリオに奉獻されているこの十月という月の間、カトリック信者の心にとても親しいこの祈り、私のお気に入り、また先任の諸教皇様方がお勧めになったこの祈りについて、「お告げの祈り」のひとつと

きを使って考えてみたいと思います。(…) 今日私たちはレパントやヴィエンナの戦いの時のように勝利を祈願するのではなくて、私たちが福音という武器、つまり十字架と神のお言葉で武装して不正や悪の霊に立ちむかう勇敢な兵士になれますようにと、マリア様

にお願ひします。 ロザリオの祈りは人間がする人間のための祈りであり、人間の連帯の祈り、贖われた人々の共同の祈りであり、それは最初に贖われた御方、教会の母であり象徴であるマリアの精神と意向を反映しています。私たちと共にキリストの肢体となり、キリストと共に御父の栄光の共同相続人となるようにと召された人々、生きている人々も亡くなった人々も、世界中の、歴史の中の、すべての男女のための祈りであり、やさしくて福音的な祈り(『マリアーリス』

人間の、人間のための祈り クルトウス』46参照)であるロザリオの祈りが示している霊的方向づけをよく考えてみますと、聖子プリアヌスが「主の祈り」のなかに見つけたのと同じことが見られます。彼は次のように書いています。「平和と一致の師である主は、私たちが個々別々に、一人ぼっちで祈ることはお望みではありません。実際には『天にまします私の父よ』とも『私に日用の糧を与え給え』とも唱えていません。私たちの祈りは皆のための祈りです。ですから、祈るときには唯一一人のためには祈らず、すべての人々のために祈ります。というのも、すべての人々と一緒に私たちは一つにならなければならないからです。(De dominica oratione, 8)

3 私は皆さんにロザリオの祈りを大いに勧めるつもりですが、同時に、先任者パウロ六世教皇が使徒的勧告『マリアーリス・クルトウス』に書かれたことを思い出していただきたいと考えます。 「ロザリオは贖罪的な受肉の神秘を中心とした福音の祈りですから、きわめてキリスト論的な方向づけを有する祈りである、といえます。事実、ロザリオのもっとも特徴となっている要素として、「めでたし」を連禱のようにに連続して唱えますが、このこと自体、キリストに対する絶えまない賛美となっているわけです。キリストは、天使によるお告げとともに、洗者ヨハネの母が「あなたの胎の子も祝せられた方(ルカ1・42)とのべた挨拶の究極的な対象でありました。私はさらに一歩

人の代弁者となってくださっています。(『教会憲章』62) マリアに祈るとき、私たちはこの世での全生涯の間助けられてくださるようこい求めます。なかでも、私たちの永遠の運命が定まる瞬間、つまり(臨終の時)に助けてくださるよう祈願します。 ロザリオの祈りは、神の王国を目指す祈りであり、贖いの実りを人類が受けとれるようにする祈りでもあります。(一九八三・十・二)

「私は望む、治れ」

本当の痛悔と罪の告白から喜びが生まれる。

イエズスの関心

旧約聖書のレビの書には、らい病者についての特別な決まりが記してあります。これによると、まず感染の危険から人々を守ることが第一であったことがわかります。「(らい病者は)人から離れて生活し、宿営の外に住ま

進んで、「めでたし」の連続は多くの玄義についての黙想をおりなしている縦糸の役割である、と言いたいのです。「めでたし」を唱えるごとに思いおこされるイエズスは、玄義をひとつずつ唱えてゆくことよって示されるイエズスとまったく同じお方です。すなわち、神の御子であるとともに、おとめマリアより生まれた御子であり、ベトレヘムの馬小屋のなかで呱呱の声をあげ、母によって神殿に奉獻され、成長するにおよんでは、父である神のみわざを行なおうとする熱意にもえ、ゲッセマニの園において世をあがなうために苦しみを受け、むち打たれ、いばらの冠をかぶせられ、十字架を背負ってカルワリオにおいて死を遂げ、死者のうちよりよみがえって天にのぼり、父である神の栄光に浴し、聖霊の恩恵をもたらすものとなられたお方にほかなりません。(井上博嗣訳)

十月になると、祝福にみちたロザリオの祈りにおいて、聖なるロザリオの女王との一致を目指します。今月中にロザリオの祈りが広く唱えられますように。 聖母マリアは私たちと共に人類を脅威にさらされた世界の救いを乞い求めるようにとお望みにならしています。

ねばならぬ。(レビの書13・46) ところがナザレトのイエズスは、このような厳しい掟を気になさいませんでした。 本日の福音書にこうあります。「一人のらい病人がそばに来てひざまずき、『あなたがしようと思われれば私を治してくださいと願ひます』と願った。イエズスはあわれと思

い、手を伸ばして触れ、『私は望む、治れ』と言われた。……『司祭のところに行って自分を見せ、体の回復の彼らへの証拠として、モーゼが命じたささげ物をせよ』(マルコ1:40、44) こう仰せになるのを見ると、イエズスは旋を気にされない反面、イスラエルの法に忠実であられたこともわかります。『司祭のところに行って自分を見せなさい』これが主のやり方でした。旋を破るためではなく、完成させるために来られたのですから。

らい病をいやされるイエズスは『偉大な印』を示されました。この印は病気を前にして、また罪を前にして、神の力を示すためです。詩篇にもこのことが記されてあります。ここでは罪を赦された者の幸せが謳われています。

「幸せなのは、その罪が赦され、過ちがおおわれた者」(詩篇31・1)、「幸せなのは、主から悪のしがらみを負わされず、心にいつわりのない人である。」(詩篇31・2)

イエズスは人を肉体の病から救うだけでなく、罪からも解放してくださいました。イエズスは、預言者の語ったメシアとして啓示されています。「彼は、私たちの労苦を背負い、私たちの罪のためにつらめられた。そして、私たちを、霊的、肉体的病から解放してくださいました。」(イザヤ53・3、12参照) ですからキリストは、教会の最高の解放者であり、この世に来ることになった原因であるあらゆる悪から贖ってくださった御方です。

心からの痛悔

「ずい人は罪を赦していただくことができませぬ。赦してもらおうと思えば、心から痛悔し、本当に回心することが必要だからです。答唱詩篇の最後の言葉がこのことを指しています。「私はあなたに罪を告白し、過ちを隠さなかつた。私は言った、『主に罪を告白しよう。』あなたは私の罪のしがらみを赦された。」(詩篇31・5) このような心からの痛悔と罪の

告白こそが霊的清めをもたらし、そこから心の喜びが生まれるのです。『主において喜び、楽しみ。心の正しいものはみな歓喜せよ。』(詩篇31・11)

本日は、魂のらい病と呼べる罪からの清めが典礼の中心テーマになっています。

前回の世界代表司教会議(1983年)で、私たちの霊的生活全般に関するこの重要な問題が取り上げられました。その会議の結論となる文書を読めば、『教皇様の声』二月号に抄訳あり) 神との和解と赦しの秘跡についての聖書の教えを詳しく思い出すことができます。

この使徒的勧告の中では次のことがはっきりと述べられています。「キリスト信者にとって、罪の赦しは、洗礼後に犯した重大な罪

信仰のともし火をたぎさえて 聖セシリアおとめ殉教者

トラステベルの聖セシリアのバジリカで行なわれたローマのおとめ殉教者のミサでの説教。

「私はいつまでもあなたを私に結びつけ、正義と公正と愛と慈しみににおいて、あなたを私の妻としよう!」

1 神が選民イスラエルに対して抱いておられる愛を、預言者ホセアはこのように表現しています。そして典礼では、キリストのためにおとめ殉教者となった聖セシリアの一生を要約するものとしてこの言葉をあてはめています。

全教会から崇められているローマのこの名高い殉教者に奉獻された光輝あるバジリカで「ミサをあげられるのは素晴らしいことです。

の赦しと赦免を得るための、通常の手段である。また、『救い主とその救いのみわざは、秘跡以外では効果がないというほど秘跡の印の内に制限されているわけではない。しかし主は、この簡単で貴重な信仰の秘跡を贖いの力の通路として役立つ日常的な効果的手段とするために制定された。それゆえ、キリストが赦しのために制定された秘跡にあずからず罪の赦しを得ようとするのは愚かなことである。』(『和解と悔悛』n.31参照)

キリストに倣う

神との和解と罪の清めへの招きは、ナザレトのイエズスの宣べられた神の国の福音の土台であります。

そしてまた、幸いにもこの祭壇からトラステベルの住民の皆様は、特に愛情をこめてお話しできる機会を得ました。この地は昔から生粋のローマ精神と歴史的文学的に世に聞こえた数多くの人々によって、非常に名の知られたところなのです。中でも、様々な宗教的また愛徳に満ちた環境によって、人の心に感動を与え

る代表的な地となっています。ここでみなさんが率先して祈り集まっていることを感謝せずにはおれません。私たちが今集まっているこの場所は、神聖な思い出と深い霊性に満ちた場所です。実に二世紀以来、この殉教者の家の跡には祈りの場が作られていました。そして八二一年、カタコンブの中で聖セシリアの遺体が再発見されて引きとられた時に、教皇パスカル一世によってこの建物が新しく建

私たちがこの土台の上に、はじめて、キリスト信者としての生活を築くことができます。キリストをまねる招きに完全に応えることができるのです。これを聖パウロは、『私がキリストにならっているように、あなたたちは私にならなさい』(コリント①0・11)と書簡の中で語っています。(…)

キリストに倣うなら、私たちは主と共に、全生活を神の光栄のために捧げることが出来ます。全生活と言えは、そこにはまことにささいなこと含まれています。まさしく聖パウロの言う通りです。「あなたたちは、食べるにつけ、飲むにつけ、何をすることも、すべて神の光栄のためにおこなえ。」(コリント①0・31) (二一・十七)

てられたものと伝えられています。ですから始めからこの教会は、崇敬と祈りと巡礼の地でありました。事実、殉教者セシリアの名は、迫害時代以来、栄誉にみち崇敬されてきました。また、ローマ奉獻文の中にもその名が含まれ、歴史、美術、建築、典礼、伝説等に関する種々の記録やリストの教々の中にも記録されました。その中には、ヤコボ・ボラジネの書いた詩的で心打つ記事、『黄金伝説』もあります。このように、セシリアは全ローマの聖人であると同時に全世界の聖人でもあります。私たちはこの二〇世紀においてもセシリアを崇敬し、祈り、その信仰と愛のメッセージを聞き、未来の世代の人々に伝え残したいと切に願っています。

殉教者証人

2 迫害の嵐のつづく時代に、セシリアはみずからを全くキリストに奉獻し、信仰の「証人」となりました。初期の頃の殉教録にもあるように、若き異教徒バレリアノとその兄マクシモが改宗したのもセシリアのおかげでした。聖アウグスティヌスの話によれば、ギリ

説教・講話・書簡等の抄訳

「証人」とは「殉教者」を意味して使います。ラテン語の「殉教者」に相当する語を使う代わりに、普通この語(ギリシャ語の「証人」)を用いています。つまり「証人」が「殉教者」となるのは、それ程まちがいないことだったので。ですから、真理を守るために屈辱と苦しみに出会い、キリストの証しを立て、苦しみぬいて亡くなった人々を示すために、彼らを「殉教者」と呼びます。(Enchiridion, p. 118, Sermon 9, 2) セシリアの場合もまさにその通りでした。彼女は自分が抱いていた真理を深く確信していましたから、勇気をもっておだやかに死を迎えました。こうして彼女は最初の殉教者であるイエズスの贖いのみ業に参加したのです。そこで聖アウグスティヌスは次のように続けています。王子たちは席につきキリストの殉教者を追い払ってしまおうと定めた。殉教者たちはその苦しみによって見離された敵たちをさがなうとしたのに、善をもって悪に報いる人もいれば、悪をもって善に報いる人もいるのだ。(Sermon 9, 3) イエズスは真理のために十字架上でお亡くなりになりましたが、それは人類を悪から救うためでもありました。つまり、罪をさがなうためのいけにえでした。「私たちが神を愛したのではなく、神が(先に)私たちを愛し、み子を私たちの罪のあがないのためにつかわされたこと、ここに愛がある。(ヨハネ①4・10)と使徒聖ヨハネは記しています。殉教者になるというのは、キリストの贖いの死が真正銘のものであることを証明し、キリストの救いのみわざに参与するためにキリストとともに死ぬことを受諾することです。殉教者は自分の上にもふりかかる恐るべき試練を勇敢に受け入れ、兄弟姉妹たちの善のため、いと高きところにもまします神の愛に信頼の心をもつてわが身を委ねるのです。ニューマン枢機卿は次のように言われました。「殉教者は、手当たり次第につかまえられ、偶然に犠牲に

なつたのではありません。神のお気に召すような犠牲、貴重な贈り物、教会の沢山の花の中の花として、選びぬかれた人々です。信仰を告白すればどんなにひどい目にあうかよくわかっていたのに、またその気になれば簡単に信仰を捨てることもできたのに、信仰を捨てず、キリストを愛するがゆえに苦闘し、ついに信仰を守り通した人々なのです。殉教者は、信仰の目で見れば神の特別な御力を証明するもの、目に見える偉大な奇跡の一つであります。(Oxford Sermons, 1843) それと同じように、セシリアもまた、神によって選ばれ、同じ信仰に生きる兄弟たちを強めるためになされた神の奇跡です。

セシリアは心に福音を保っていた

3 セシリアは、福音書のとえ話が述べているように、ともし火をつけ予備の油も用意して天の国の花婿を待っていた賢いおとめたちの一人でした。毎日聖書を読み、神に仕える聖職者たちの話を聞き、信仰のともし火をはぐくみ育てていました。殉教録によれば、セシリアは福音を心に保ち続け、致命傷を受けたときには、右側を下にして横たわり、両膝を曲げ、両腕をのびし、頭を垂れ、右手の三本の指と左手の指を一本のぼして、唯一にして三位一体なる神を信じていることを示しました。これがこのバジリカに保存されているモデルノの手になる聖セシリアの美しい姿です。

これこそ聖セシリアが私たちに残してくれた根本的な教えであります。私たちが信仰のともし火をもやし続けなければなりません。天国の祝宴のために油断なく見張り続けねばならないのです。時間は私たちのものではなく、いつ私たち一人ひとりに、「さあ花婿だ！ 出迎えないさい！」という呼びかけが聞こえてくるかわからないのだから。

ともし火は人生での思いがけぬ出来事に対

処する力を与えてくれます。その出来事がたとえ苦しみに満ちたものであれ、争い合うものであれ、人生の終わりに私たちを待っていてくださる神と共にある永遠の幸福の光の下でなら、勇気が出てきます。真理の証人は、ときとして、いらいらさせたり、争いを生じさせたり、憎しみや迫害をひき起こすこともあり得ます。天の神はすでに預言なさっていました。「彼らが私を迫害したなら、あなたたちにも迫害を加えるだろう。(ヨハネ15・20) 「私のために人々があなたたちをのりし、あるいは責めるとき……あなたたちは幸せである。(マテオ5・11) 信仰によるとキリストは世に対する勝利を収められました。歴史の終わる日まで毎日、キリストは常に私たちと共におられます。ですから、ローマの殉教者セシリアとその他の大勢のキリストの証人たちの墓の上で、信仰のために現在苦しんでいる大勢の兄弟姉妹を思い、私たちが賛美と愛情で胸が一杯になります。あの人々のことを思い出しましょう！ 彼らのために祈り、感謝しましょう。彼らのお手本にはげまされて私たちの焔が燃えつづけるのですから。

このともし火は祈りと黙想とを絶えずつぎ込むことで保たねばなりません。真理の光といえども、一人ひとりの深い信念と超自然的な恩寵の助けがなければ、私たちのうちなる力を引き出せないからです。セシリアがしたようにこの世で数々の困難や不幸に対抗するには、すべてを、生命さえも、与えることができるように、信仰のともし火に明るく火がともり、その光が輝いていなければなりません。

4 ご存じのように、聖セシリアは中世の頃、歌と音楽の芸術家たちの保護者とみなされてきたと、殉教録に興味ある説明があります。「心の中でオルガンを弾きながら『私がかめにならないように、心と体を清らかにしてください！』とセシリアは神に祈り、歌った」と書かれています。十五世紀以来、肖像研究

家は楽器をもっている聖セシリアの画像に強いインスピレーションを得ました。けれども、一五一六年に、創造力に富む天才ラファエロは、古代の「受難(殉教録)」の見事な要約と、新たな解釈とを合わせて有名な絵に描きました。地上の楽器は足もとにおいて、天上の楽の音にじっと耳を傾けているセシリアを描いたのです。

楽器の演奏と聖歌隊の歌声とが、聖セシリアのとりにしによって、人々の靈魂を高く揚げ、友愛と祈りの心情に靈感を与えて、神に光榮を帰し続けることができるようにとの熱い願いを抱きつつ、キリストによって示された神の真理のハーモニーを認め、常に楽しめるよう、このローマの殉教者に恩寵を乞い求めましょう。アーメン。(一九八四・十一月二十二)

ロザリオは、祈る人間の最高の姿である聖母マリア、御父のご慈悲を乞うてキリストにおいて祈り求める教会の模範であるマリア様に向かつて、辛抱よく訴える祈りです。

▽ キリストが赦しのために制定された秘跡にあずからず罪の赦しを得ようとするのは愚かなことである。

▽ 天国の祝宴のために油断なく見張り続けねばなりません。いつ私たち一人ひとりに、「さあ花婿だ！ 出迎えないさい！」という呼びかけが聞こえてくるかわからないのだから。

▽ 同情と親切、忍耐、家族のためによるこころみずからを犠牲にする態度、これらがあれば、愛の雰囲気の中で生きることができ。

▽ 個人と社会の安寧を守ろうとすれば、習慣、法律、政治経済教育の諸制度が、結婚と家庭生活を強めるのに役立つものでなければなりません。

